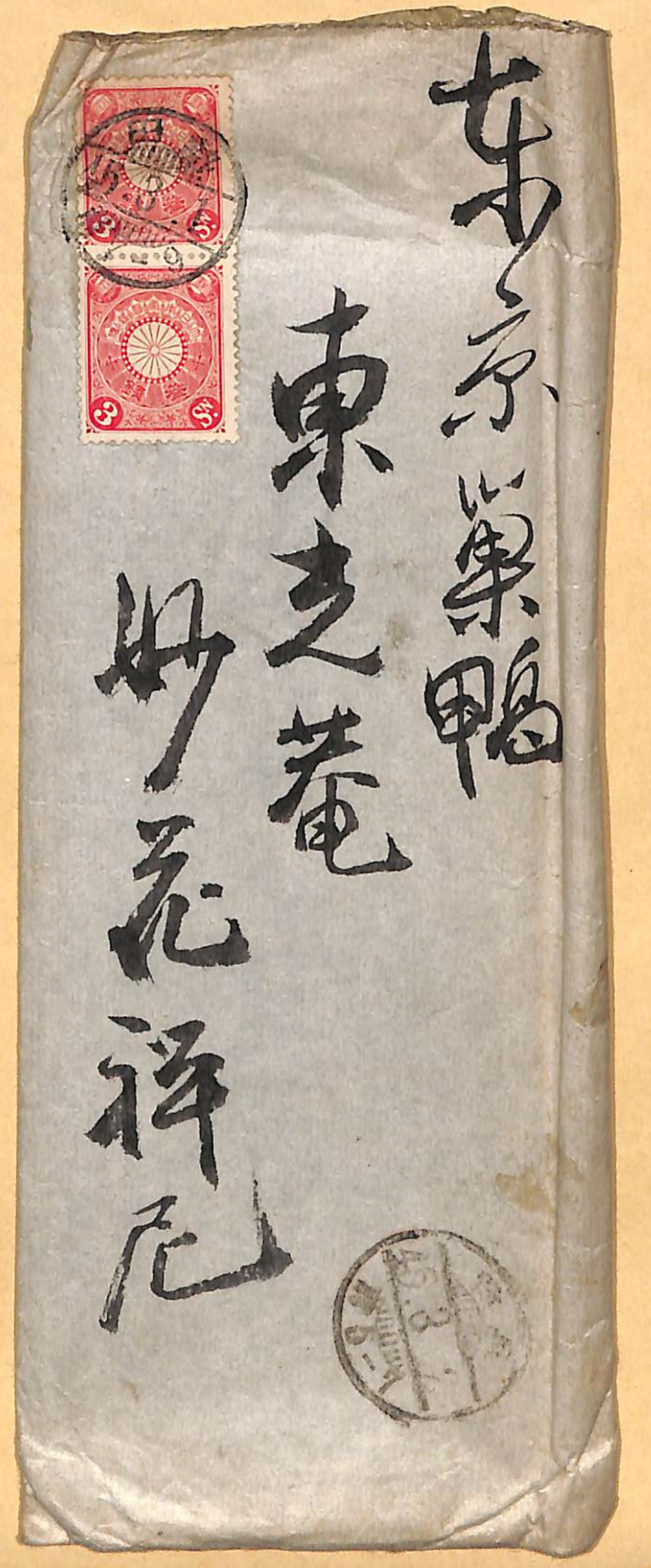
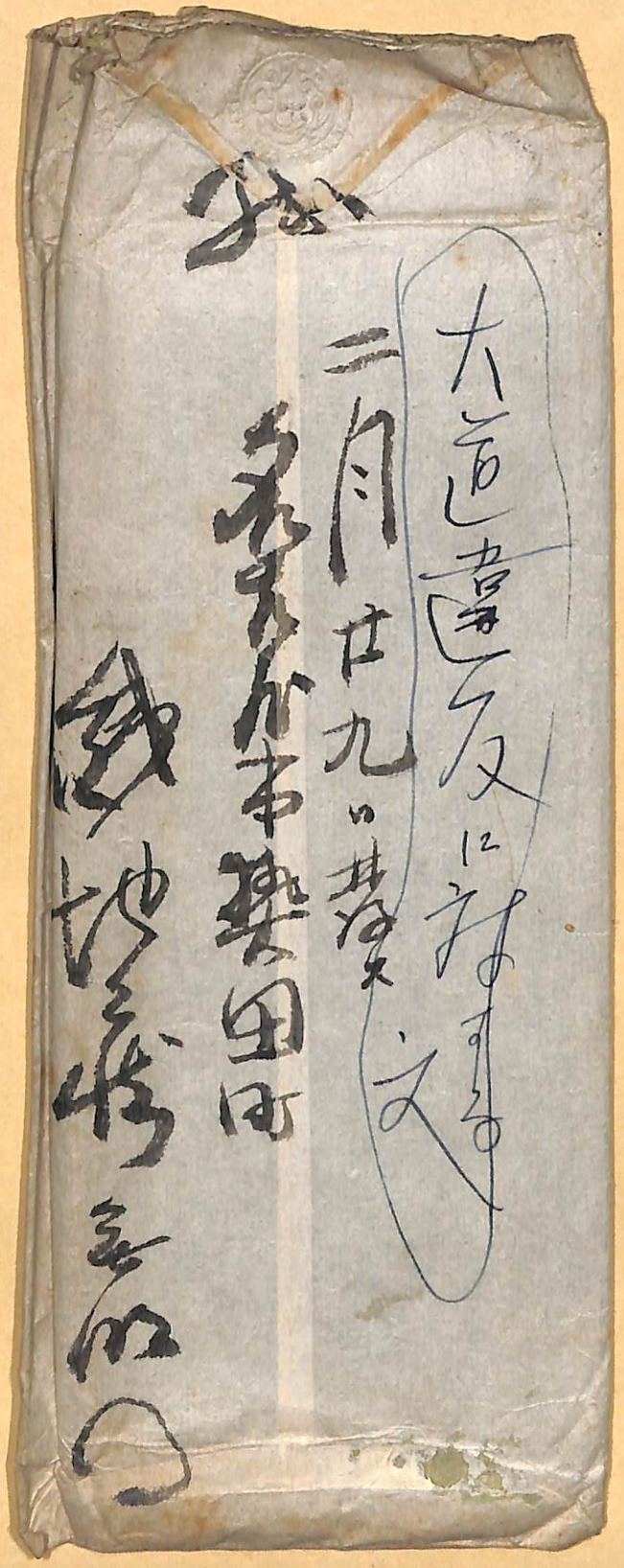

東京巢鴨
東之菴
妙花祥尼


大道臺反に対する
二月廿九日発文
第弐号
沙汰書

おもてなしをいたしやく中の者列に米の
ちゃ菓子を多くもてなす又他の口合入て居
さてこちらに居るのでは古郷米神仏
高札の都をやり居申さぬ様ならば如何
よろしく必定のもの家こうの内やとも
家来三〇両程を様に人百姓に生出して
あつく仏礼いたす〇去る人とかたきに
陣上様の仏参りは出げ合をおろそかに
人今日本に比べ天子様の御大徳米
御参詣申合を軽く如き恵と者何れ
ちりもつて物を参申て忠すると実に
安代を様に様の法かげ合を毎日
人々を安心申合国の天子
如代忠に大造びなる古郷米の安
新様のもの人百姓も学を
すると六八は度は金ビラ様

二

御教導のほどありがたく〱
只今のべられましたる御説明でござりまする
其処とは世の者佛法修行の所とは
御ぐ余のほどと申すひつくるめて
善心としてまづ正常と信ずるまで
正しく如何覚のむつかしんで申す
ちう斗りし至上ござります御かし正常
をおそれいく御上様の法益号かなするに
およびません〇又本宗の所とございますは
遠方までも行きとゞきましたもの
べつ段にござりませんぞやく
そくしん済度するかと申されても
金。ヒラ大権現様の御教示をと
まへ〱に至を進め正しく致して
神の道の作法とおもふ様これ
と存じ候まするそこをまず申して

こし

此事の陰為とれ無事相こたまり
なかなかもさうあらひつめでございます
○又まゐりましては出家の神とげなくなりては
御由ゐるもかずしかりまする人ゐりまする
出来て難けれ人てまゐりて教ゑを出来し
然かひかくしみすがけれはまゞ御ゐる
ゐる是も神様ゐ得ゐかゆしがりまする
知らいそれ被ゑ書えあおやすくいよれ
あまられいける是い使とあひそ様なるさ
ござく キタナイスカン様でたいふでは
のべられましたり因縁といふ人様まさ
個のむるの人はわまふ一だんはるくれ
是れかくしのことありて悪心とおるのべ跳き
ゐする游り為とぬれますで一とうか一番ノ
ゐま是きまえやまとれ汚為様いらぬ
御ろくよ教会でまかく人ゐるまれしたは

はやくまいて。上様に御
心をきせぬ様にねがひ奉りて
はるかの所まで参上致候
今ごろはちくせつでス
の私も知れ申て年を年中
よくこまてすまし
の悪いあく者ばかり切り
できねばなりませ
ん

れるようにすること
御願ひ申上候
芭蕉翁記念碑
地方廣で仕事はなかなかの
レきくとどもし
ようにとのことでス
又は神様御願ひ
御願ひ申上候

書面にて上ゝ様ゟ大坂高麗橋
西鶴様へ参ゟ参ゟ
てゝはゝゟ
郡山ゟ
て生人ゟ
竜ゝ寺ゟ
ゟの
共一面ゟ

○神谷左門稲垣郎ゟ郡ゟ
蔵ゟ
ゟ
ストン〳〵ゟ
ゟゲナ五六人ゟ
ゟ蔵ゟ
ゟ
ゟ○年ゟ
今ゟ

扨ことに吾の本　吾輩日本国に生れたる
日本の人なれば本心へつかへずぞらんば
ありけれ神仏の教のなさけなれ
なげやかくしん計りては心の守りは
もろしれ正神ノ精神妙正作ノ
大和魂精妙と一心に力を入て天よ
おろかなるぞん女まも神ともすまずて
ーまつしまは霊異あるまじく

字ゆの御傍看ヵ二スイでるのこと
表裏や二程ヤカクバンの悩幸存ヵ
ころせとみな心御関わりよくでるとも
姿ごつ精霊や我和尚字の存する
道在人ごとに名利を捨てゐる人てらんと
事すあるこ大原子(アン)殺は○今○酒○烟草(マヨツテケツカル)
こうして也平ってんを平一様じも
○拙者ごすなれ人くは皆地ごくりゃ

〇百丈禅師の語とて古人語りに大修行
ノ人も因果に落るや落ざるやと問ふたら
不落とおちて五百生野狐に堕られたとい
ふ事じや一口は大事なもの。是は毛も言ず
ば常に慎んでよく善悪の差別じや
ところでも悪事と見て以てさるべく
おもふまいや〇まビンズルと云ふ尊者
おはなしが有るまで本尊の仏像を釈尊の
そばずい話に何か合はるときは五分の其一世
までは王をおがんでかしこめも智を見するの
おしやるならば此話し又〇佛一子様苦時
油やなどを新におがまんとただそこ明く入カ
付る人〈御ずまり〇修身ならば一お出すてそて
そく〈こ〉んでどいりふ所を些すかばぞく
〇此人の苦をうまく修行となえて以てを
すべて古人御別ならんとする正で

扨ハ今般存候
〇宮様も御集会にて在候ノ事ニ候へ共為
大事件おこりし訳ハ上様始め
御法主をも一同ニて其事ニおゐて
陣ニ於テハ付候ゆへ石神谷門
蓮如上人ハ御法主御心事ハ何事も
大いにあまいか事ありし儀とめる
難有しもの也日蓮様とて

八

様違ない事ニ候得共是非皆々下ニ
信心かたきハ上へ勝手ニて付候
上言之ル事ニ事之ヘ付氏和ハなる
御とりなきの事にハ宗法様一宗
とけざる周防の住者アノ宛名ニ付て来
むしられ誠ニ困る一図一様にてらる
此許てすみ候て俳句居の事
〇此段御届ケおくれし一つのおくれし

一すもうごく所なれば是ゞ見てとりまや
ごかりしかのうらぶぬ中まに是こ大はや
科牙新ぐやうよりよりまぬ沖ぶ
ぬ出ぬかりてぬかくそばあ
ぐくうまれがし
事是蔵とふ
大出とうすもうぬ
ぬ事是ぬあれぬ

ぬ

きりくワレりヤ
くうこもの色ぬ
如事ぬ四ぬ
金ぬ三ぬ大仏四
大勢の人とだまぬ
色ぬ大ぬ
ぬのぬ
ひぬあくぬ

ワレりヤ是とうまあ

○かゝる人のあるて堂宇伽藍を立る人ハ
ゆゑ〳〵あるべし日本国に佛法を弘め
ひろめ中古に佛法やゝ盛なりしかども

○慶道智ト如来智と二つなり
所詮如来智ハ別なし慶道智ハ有為の
事なれ共一切の中にて大切なるまゝ
回向するばかりなり今佛

ぞ〳〵十一名の中に信心ある
いなを四方の中に不国家の中に
つゝ事本こと知又四海の内
今又ハ神道の中さ有ハ生死成と思ふ
大なれ共ハ神道ハ生死成ハ
なきを思ひ此ハ道理なり道理と
離れ理と事ハ中ヤコシナるなり
道ハ佛法ハ道理ヤ世中ハ国ハ本ハ
ようやつく〳〵ありやくるれ
まるなどなるべ

長大

又たく蟹やなまずの仲をとりもちて御立腹なされ
これていらるまいが またまた手を出さずとも和たイケンが
言ませぬ又サキに中西さん船頭が大座さ白ども
おたで面白ぬなやかれ茶ささらい先年は
おもれこちらへ参りて噺本とも面白い帰りぬこ
人ていなるモウあとは何やさぬても参りて孫申
若者といふたやても是は私さんや
もしより中にはひとつ孫申しや
茶所のから私さ言中にはさからのに大
慶至極の事やら先年あれはいかにも
やりまして大分笑て暮らをる都合かね

以来之のやつらと云へまても茶之茶で
ドンガン〳〵 勝れた立派であるコンナ老ほれの
おやぢがヘイコウ致候と相止めとて候とて
て捨んて居ますつもしさぞかし御さるは済まい
御同前あるへく候○恵林之御先代様にの
の御出会は若者でありし御心と早く
ちやんと渡て下さい悪いよろしかと成
候也 かしこ

二月九日
千代 出雲の
恵林和尚
御侍者

○ボン、寒くてもよくお花い 夏のこと至り